二〇一七年第四回宝井其角俳句大会

「二十句詠」「俳文」入賞作品

★三席「灯台へ行く道」

益岡茱萸（ますおかぐみ）
東京都世田谷区
六一歳

机の上に、犬吠埼灯台がある。高さは十センチ程しかないけれど、本物の美しさをよく写していて見飽きない。設計したのは、リチャード・ヘンリー・プラントというイギリス人技師で、九十九里浜に因んで、螺旋階段を九十九段にしたと聞けば、人柄も良さそうな気がする。

灯台が好きで、旅先で見かければ、必ず行ってみる。灯台が建てられている場所は、岬の突端なので、例外なく景色がすばらしい。視界を遮るものが何もない場所で、潮風に吹かれながら、空の青と海の碧を貫く白い灯台

を眺める。私にとっての贅沢な時間だ。

北緯35度42分26秒、東経140度52分07秒。これが犬吠埼灯台の位置で、緯度経度を使えば、急に鳥の目で見えてくる。全国の灯台の位置を結んでいけば、ほぼ日本列島の形になる。衛星から見ると真夜中でも輝いているという日本。その一番端の光は、間違いなく、自動販売機ではなく灯台だ。

日本百名山のように、日本の灯台50選というのがあって、何時か半分でもいいから訪ねてみたいと思っている。まだそれほど多くの灯台を見ているわけではないが、中では、鹿児島県の佐多岬灯台が心に残っている。もっともこの灯台は、観光客の立ち入りは許されていない。隣接する展望台から、海に浮かんでいるような姿を眺めるだけだ。

この展望台に向かう道がまたいい。ガジュマルやソテツ、ハマユウ、ビロウなど、亜熱帯植物が猛々しく群生する道を、本当にこの方向で大丈夫なのかと、何度も迷いながら進

む。道を聞こうにも人影はないし、本土最南端の岬なのでとにかく暑い。そして汗が全身から吹き出す頃、やっと視界が開けた。断崖に叩き付けるような波が見えて、強風が海をまっすぐに渡ってやって来た。

灯台に行く道は無し卯波見ゆ

この句は、佐多岬を思い浮かべながら詠んだ。あの瞬間の胸の高鳴りを言葉にして残すことができて、俳句を始めて本当によかったと思った。

★三席「賀状来る」

砂山恵子（すなやまけいこ）
愛媛県西条市
五九歳

変電所に千の明りや冬の百舌

狐火や好きになりしは同じ人

絹糸をすつと抜く音雪をんな

山眠る阿吽の犬は口閉ざし

ニートてふ選択のあり日向ぼこ

寒明けや叩いてつぶす段ボール

春泥や緑の絵の具足してをり

如月や橋の下這ふ橋の影

老巫女の赤き袴や水温む

遠きほど青き潮目や糸桜

うららかや網目抜けたる雑魚の群れ

弓形に降りる遮断機花は葉に

惑ふほど高く飛びたる初ほたる

水彩画の紙の反りたる暑さかな

敗戦忌空は青いと教わった

台風の中で見てゐる星図表

走り根に走り根の影冬近し

冬至てふ一期一会の日の夜明け

非常口の光を背中に除夜の鐘

初恋の残り光のこと賀状来る

★三席「グミを噛む」

中尾美琳（なかおめいりん）

神奈川県伊勢原市

六九歳

ルッコラと巻き舌にして夏匂ふ

アイスキャンデーあとひと口を落としけり

古靴に日のさしてをり蟻の道

缶蹴りの缶みつからぬ麦の畑

仮の世の母は小さし水中り

青空に青鳩の海芒種かな

耳たぶにピアスのあとや遠花火

鳳梨の香を詰めて旅終へむ

グミを噛む二百二十日の雑踏に

秋茗荷目を合はさずに母と居る

大根を抱へ一駅もどりけり

小春日の分子の量と乳房と

ゆで卵つるりとむけて年つまる

太箸で孫の背丈をはかりけり

日晒しのおばんざいとて春大根

陽炎に乗る子のいない三輪車

ふわふわと頼りない春ピンで止む

聴覚も視覚も持たぬ木の芽かな

啓蟄や行きかふ人は皆他人

如月のコインロッカー在りにけり

★三席「**指に風**」

うにかわえりも（男性）

東京都世田谷区

二四歳

手づかみで湯気ごと餡へ放る餅

御降や柴犬の背の毛の光る

鳴り独楽を止めようとする指に風

ゆるされて来る寒禽のゆあみかな

丸文字の絡みつきたる寒見舞

花林糖大皿に盛る春の朝

紙風船打つ手のひらの丸みかな

網膜を離さずひとひらのさくら

耳掻かる少女の肩に留まる胡蝶

割箸でつつく木の芽和のみどり

薔薇の香の染み入る雨後の砂場かな

天瓜粉漂ふ夜の洗面所

悪びれもせず毛虫這ふ膝のうら

ゆるやかに香魚の滑る山のみず

口論は止み停電の夜の涼み

虫干や栞紐みな揺れてをり

口角を濡らし桃食ふ誕生日

説法に飽きて転がる檸檬かな

振り向けば足跡のなき花野なり

練炭を傍らに読む芥川

★三席「**春の夜**（俳文）」

十一（つなしはじめ）

静岡県焼津市　四七歳

少し冷たい風が吹く冬の終わりの夕暮れ。

四合瓶を提げ、歩いていると、遠くから硬質な。重量感のある音が近づいてきた。

それは青銅の巨人の立てる音で、大きく腕を振り大股でガシンガシンと歩く姿は、何処となく可笑しげで、ついつい自分も真似をしたくなった。

しかしいくら真似をしても、巨人のような重厚な音は出ず口で、「ガシンガシン」と言ってみようかと思ったが、恥ずかしいので止めた。ふと気がつくと巨人の歩いた後ろは夜になっていた。

どうやらこの巨人は『夜』で、通り過ぎると夜になるんだな、と一人合点していると、前方に白い靄が立ち込め、戸惑うように蠢き巨人へと流れてきた。

巨人は右の握り拳を惚れ惚れするようなフォームで白い靄に叩きこむ。

すると、悲鳴が上がり靄は白い人の形となってから、血を吐いて死んだ。

途端に風が少し温かくなり、梅の花が綻び始めたので、どうやら青銅の巨人は『夜』ではなく『春の夜』なのだろう。

そして冬を倒さないと、春の夜にはならないのだな、と知った。

巨人が、

「喉が渇いたので、それを一本くれ」

と言うので、一本くれてやった。

錆びたりしないだろうか、と思ったが、この巨人は青銅ではなく、『春の夜』だから大丈夫だろう。見る見るうちに一本を空けると、巨人は今度はとても追いつけない速度で立ち

去った。

『春の夜』が呑み干した酒瓶は今、梅の花を一枝さし自分の部屋に置いてある。

少し良い香りのするそれは、混沌とした部屋によくあうのだった。

青銅の巨人の歩む春の夜

十一

★三席「**寒夜**（俳文）」

立石采佳（たていしさいか）

神奈川県秦野市

七五歳

楊枝を格好良く使う男性を見たのは五十代の頃だったろうか。東京丸の内のパレスホテルで瀬戸内寂聴さんの講演会があり、ランチをしていた時のこと。食事を終えた初老の上品な紳士が、ゆっくりと楊枝を動かし（大抵は口を開け、ともすると音も発する）全く嫌みがなく、むしろ美しい所作に驚いた。生き方のなせる技か、気を使っているのか、その両方かも。楊枝はあのように使うべしと思っ

た。

椅子に座っている時はわからなかったが、立ち上がり帽子を被ると、かなり上背があり後ろ姿も素敵な紳士だった。

こんなことを思い出したのは、六十を過ぎて歯科医に通ううちに、奥歯に繊維質の物の挟まることが多く、手鏡片手に楊枝を使ったりするわが身を意識するようになったからだろう。

築四十年の家の台所・洗面所は寒い。夜の歯磨きを無精して楊枝ですましてしまうことがある。羞恥心を持て。

年惜しむ軽石の減る踵かな

★三席「ココア」

鶴巻貴代美（つるまききよみ）

東京都世田谷区

六〇歳

膝頭寄せて決めけり子猫の名

イヤホンの固く絡まる余寒かな

みなすでに父母亡くて夕桜

校長へ朝礼台へ飛花落花

木漏れ日に夫を待ちをり今日立夏

白南風や無電柱化の計画書

朝曇けふ生きるため起き上がる

蓮の花雲なき空へ崩れけり

みんみんの絶えて大樹の揺れ残る

初秋や豆腐屋の干す晒布

予報円うち重なれる九月かな

澄む秋を揺らさぬように庭師ゐて

草ひと葉沈め飛び立つ飛蝗かな

折りあわぬ母子の思ひ吾亦紅

仁王像睨める寺に鵯鳴けり

ココアとく匙音高し獺祭忌

破るるはひと葉だになし親子草

炬燵猫鬚をときどき動かせる

日向ぼこ爪切る足を引きよする

雪晴を犬に引かれて行く人よ